

滞日アフリカ人のアソシエーション設立行動と集会活動 ——滞日カメルーン人の協力ネットワークと階層性

和 崎 春 日

Abstract: This article aims at describing the way of life of Cameroonians in Japan which has not been studied in the least up to now although there have been the studies on those of Koreans, Chinese, Brazilians and Peruvians coming to or living in Japan.

The writer intends to describe the way and process by which Cameroonians organize their comrades with the same nationality and settle their voluntary associations in Japan. Through these descriptions and analysis based on them, the writer intends to point out that Cameroonians living in Japan have already succeeded in establishing their co-operative association trying to involve Cameroonian newcomers and keeping on it although its coverage is limited to the level more than stable middle class except unstable lower class coming newly to Japan with authorization by immigration office expired.

要旨: この論考は、さまざまな国から日本にやってくる移民や外国人労働者の生活動態を考究するテーマのうち、今日までまったく触れられてこなかった在日・滞日アフリカ人の生活動態を記述・考察する一連のエスノグラフィーの一つを構成するものである。本稿は、日本にいるアフリカ人のうち、特にカメルーン人が、共同、親睦、交流や相互扶助を目的として、ボランティア・アソシエーションを設立する動きと、すでに設立されたボランティア・アソシエーションの活動の一端を明らかにする。そして、結論として、本稿は、まず第1に、在日カメルーン人の集合行動がもうすでに常態化しているほどに日本に根付いて組織されていることを、指摘する。そして第2に、そうではあるものの、親睦や共助の社会機能をもつこのカメルーン人結社の包摂範囲は、不安定なオーバー・ステイ層を包みきるほどには及んでいないことを、指摘する。

キーワード： 在日・滞日アフリカ人、在日・滞日カメルーン人、相互扶助、ボランティア・アソシエーション、階層差、オーバー・ステイ

はじめに——協力と権威と

日本に滞在しているアフリカ人の生活は、入国や在留に関わるさまざまな規定のもとで、たやすいものではない^(注1)。また、日本での短い滞在期間中にせよ、それが居住状況になり安定度を増して在日状況になったにせよ、マジョリティ住民である日本人との関係の持ち方や他の外国人との関係の持ち方にさまざまな困難と苦勞が伴っている^(注2)。こうした状況のなかで、何らかの形である程度まで日本に足場を定め得たカメルーン人たちの唱導のもとに、多様な「仲間」を結ぶ形で、カメルーン人同士の協力関係や、マジョリティ住民である日本人との協力関係を模索して、協会や団体を設立しようとする動きがみられる。

そこで、ここでは、滞日カメルーン人たちのその結社を創ろうとする行動と既に設立された結

社の活動とを、検証する。この稿は、在日・滞日カメルーン人の生活動態を、日本とカメルーンをつなぐ線のなかで探って^(注3)一次資料を提示した第一稿「来日カメルーン人の母村・家族状況－来住アフリカ人の母国における社会・経済状況」(和崎春日・田淵六郎著、『スワヒリ&アフリカ研究』17号、2007年、所収)について、日本におけるカメルーン人の互助・協力にかかわる集合行動を、まずグラフ・誌として書きとどめようとする研究ノートである。ここでの論点は、こうしたカメルーン人同士の協力行動およびそれを目指した組織化が、階層をまたいだ協力体制をとっているのか、一種の権威制のもとに限られた峻別性を示すのかどうか、である。

1 日本カメルーン文化交流協会

日本カメルーン文化交流協会の設立は、芸能を志すカメルーン青年の日本との交流のなかから生まれてきた。この青年は、カメルーン北西部州出身のサミュエル・ンフォー・ングアという。サミュエルは、1970年カメルーン北西部州の英語圏のなかにあるバフトウの街の生まれで、現在37歳である。英語圏に生まれ育ったにもかかわらず、英語圏の権威あるブエア大学ではなく、フランス語圏のカメルーンの「トップ大学」と言われるヤウンデ大学英文学部を卒業し(1994年)、さらに進学してヤウンデ大学で演劇芸術専攻の修士号を得ている。その後、カメルーン国内で俳優および演出家として幅広い演劇活動を展開してきた。大学院に進む前の1994年には、このときまでにすでに演劇活動の十分な蓄積をもち、国民芸術文化祭への貢献を認められて、カメルーン文化省より名誉賞を受けるまでになっている。ここで、サミュエルは、舞台やテレビでの出演を通じて、地域社会内の人々の関係を促進することの重要性を説き、地域社会の生活水準を改善することを目的として、カメルーン民衆にある生活苦や社会問題を訴えている。オピニオン・リーダーとしての意識と発言が目につく(写真1参照)。

1999年、カメルーン国際映画祭を訪れた、国際演劇協会日本センターの小田切よう子に出会う。彼女が、サミュエルが出会う初めての日本人であった。このときから、国際演劇協会カメルーン・センターの副会長をつとめるようになった。彼女からブリーフィングを受けつつ、日本の伝統芸能について学んでいった。そして、日本には、2000年8月に、日本国際演劇協会の招聘により初めての来日をはたし、能・狂言のワークショップに参加している。このとき、狂言師・



写真1 在日カメルーン協会で幹事・司会として活躍するサミュエル・ンフォー・ングア。

野村万之丞に出会う。野村万之丞は、サミュエルの言にしたがえば「万之丞師」となるが、世界各国から役者たちを集め、音楽、踊り、オーケストラ、歌、そして身体を使って、「美しく」（とサミュエルには映った）『唐人相撲』を演出した。この10日間のワークショップにおける出会いが日本への関心や「愛着」を生み出すことになった。サミュエルは、このときの狂言や万之丞との出会いを、自分の新しい方向を発見せしめた、と述懐する。さらに、演劇の持つ可能性について、これが異文化の齟齬を埋めうる、相互理解の手段だということを悟り実感した、という。

その情熱をもって、続いてこの翌年2001年にも、文化庁主催のフェローシップに参加し、再来日を果たした。そして、野村万之丞の作品にますます魅力を感じるようになり、万之丞に憧憬をもって近づきたいとさえ思うようになっていったという。このファナティックでさえある情熱が野村万之丞に通じ、2004年7月に野村万之丞プロデュースで総合演出の『復元・阿国歌舞伎』に抜擢され役を得ることになった。次いで、同年、小泉八雲作『耳なし芳一』でも配役を得たが、この上演前に野村万之丞は急逝してしまった。だが、サミュエルはじめ役者たちやこの演劇を支える人たちの情熱によって、『耳なし芳一』は上演にまでこぎ着けた。

サミュエルは、野村万之丞や師を取り巻いていた俳優、スタッフとともに日本で仕事をできたこと、そしてそれが自分の舞台俳優や演出家としての経歴に大きな経験と成果になっていること、万之丞自身そして事務所の人たちが自分を「家族」のようにときに接し、ときに指導してくれたことに、大きな「恩」のような感情を抱くようになった、という。また、演技や演劇について激論をかわしてきた共演者を、「宝物」という表現で表したい、という。

このようにして、サミュエルは、日本を単に「新たな宝物を探し出した場所」（サミュエルの陳述）としてではなく、自分の人生と切っても切れない場所とまで認識するようになり、アタッチメントの感情を抱くまでになっている。そして今日、サミュエルは、「私は、日本の演劇を十分理解できる唯一のカメルーン人」（本人陳述）とまで自己認知するようになっている。これに加えて、万之丞との「演劇上の約束事であり夢」であったとする、日本の芸術を故郷に持って帰るということを、自らの目標の一つとするようになった、という。こうして、サミュエルは、急逝した野村万之丞の「助言」に基づき、日本カメルーン文化交流協会の設立を訴えたのである。

この日本カメルーン文化交流協会設立の呼びかけに対しては、その大きな眼目としてのカメルーンでの狂言演劇の上演という目標にむけて、困難をとめないながらも確かな反応を得ていった。これには、野村万之丞の遺志を継いだ夫人が立ち上げた事務所が、「駐日カメルーン全権大使ンベラ・ンベラ・ルジュヌ閣下との全面的なご協力のもとに、設立に向けて準備してきた」という。そして、こうした努力もあって、国際交流基金の援助をえて、この呼びかけの翌年、狂言カメルーン上演は、実現したのである。

だが、日本カメルーン文化交流協会には、日本にいるカメルーン人たちは、メンバーとしては、多く参加しなかった。たとえば、長年日本に住み、在日カメルーン人協会の初代会長である日本通の東工大ケンネ教授も、狂言のカメルーン公演実現に向けては、カンパもし、日本人にも声をか

けて宣伝もした。ではあるが、この協会の会員になるというふうには動いていない。長年レストランを経営してきたエレクトラも、資金援助については、カメルーン人の友人仲間や自分が経営するレストラン AfroWave にやってくるカメルーン人客にカンパをつのつたが、日本カメルーン友好協会のメンバーになってはいない。

日本にいる日本人カメルーン関係者のほうは、野村万之丞の高名はすでに知っており、こうした狂言や日本伝統文化の分野で「弟子入り」してまで日本通になってカメルーン—日本両国の交流に汗を流すカメルーン人がいることとその活動に、驚きをともなった賛意を示した。カンパをもってこのカメルーンに関わる活動に関わった人もいる。ただ、日本カメルーン文化交流協会の入会申し込みについては、それまでに、こうした熱意あるカメルーン人青年がいるということのカメルーン滞在経験者のなかでも限られた日本人しか知らず、その情報が急遽もたらされ、また、野村万之丞が弟子との交流を通じてカメルーンとの関係に熱意を示していたということも急遽知らされたこともあり、「入会」については二の足を踏むものが多かった。

もうひとつ、このカメルーンと日本をつなぐ意義ある行動に、日本在住の一般カメルーン人にも一般日本人にも、判りにくいところがあった。それは、日本カメルーン文化交流協会の設立とその入会への賛同と、カメルーンでの狂言公演実現の2つの意図・目標が混然と一体化していたことである。この公演実現と日本カメルーン文化交流協会の入会の訴えには、もちろん万之丞夫人の尊い遺志を継ぐ志とサミュエルの一途で熱意に満ちた日本伝統芸能への姿勢が説得力をもつものではあるが、有限会社のK事務所と株式会社のTネットワークと特定非営利活動法人Aの3者が前面に出てきており、これが興行のみ成功に導こうとするものか、あるいは特定者のみの利益につながっていくものなのか、また長い期間の日本人カメルーン人間の友好協力や、そのためのカメルーン人同士の協力の基礎作りに資するものなのかは、不透明で判断しにくいものであった。この会の呼称も、正確に詳細に見ると、ときに日本カメルーン文化交流協会とうたわれ、ときに日本カメルーン友好協会とうたわれて、その実態にいくばくかの疑問符がつきもした。こうした事情が在日カメルーン人たちやカメルーンを知る日本人たちに、躊躇をもたらしたと考えられる。

こうした日本人やカメルーン人の逡巡には、以前、在日本カメルーン大使館設立後の、第2代フェリックス・バユ大使時代に、元東京電力会長やカメルーン霊長類研究の大家・河合雅雄教授などの名前を使い設立準備のパーティを開催して、やはり日本カメルーン友好協会を謳いながら、利益目的ともうつつの奇妙な動きをした日本人の映画監督がいたことも関わっている。また、筑波にある国立研究機関に勤務する研究者が、在日本カメルーン国・初代ツァマ大使と当時の羽田孜内閣大臣をはじめとする政権政党の国会議員たちとをつないで研究会を開催し、その後、それによって権威づけを得る形で、やはり日本カメルーン間の友好協力の会設立を謳いながら、自らの領域であるカメルーン・コーラップの森にある草木をめぐって「開発話」を提案した、と人々が判断するような、きな臭い動きに、大きな警戒心を働かせる日本人もいた。

こうしたこれまでの日本カメルーン友好協会設立にまつわる「きな臭い」動きに警戒を見せつつも、それでもなお、日本にいる日本人もカメルーン人も、今回のサミュエルの動きに利己を超えた真摯な誠意を認めた、と言ってよい。とくに、日本にいるカメルーン人にとっては、日本の伝統芸能や芸術といった「高尚な」分野で日本にどっぷりと「根付こうとして」いる、あるいはすでに「根付づいて」と言っているカメルーン人がいて、彼がしっかりした水準の一定の高みに達していると認められており、日本の高名な「芸術家」集団を巻き込んでカメルーンに繋がる運動が起きていることは、励みになることであり、頼もしく、ある種誇りにさえ感じるカメルーン人もいたのは確かなことである。

2 在日カメルーン人協会「ACAJA アカジャ」の活動

2-1 在日カメルーン人協会・年末文化祭の挙行とアフリカン・レストランでの勧誘

アカジャとは、日本にいるカメルーン人たちの結社のことである。アカジャには、会長と副会長職に相当する幹事たち3人の役員がいる。アカジャの具体的な活動を支えているのは、幹事のBasile バジル、Electa エレクトア、Samuel Ndifor Ngwa サミュエル・(ンディ)フォーングワである。バジルは民族でいえば、バミレケ人でより細分化された民族分類でいえばバンガンテ人である^(注4)。バジルが、2005年12月3日に開かれた「アカジャ」年末文化祭の参加券販売と会計



写真2 在日カメルーン人協会・年末文化祭のパーティ券。

管理を行って、この行事遂行の中心的な役割を担った。参加券は、3000円である。バジルは、埼玉県・越谷市大袋にあるクリス・アフリカン・レストランや、春日部市一ノ割にあるカメルーン・レストラン Afro Wave に出向いて、めばしいカメルーン人や日本人に、この券を売っては、在日カメルーン人協会への参集を求めている(写真2参照)。

カメルーン人同士が年末に交流の会を開いて集まるにしても、これに参加するための準備や勧誘活動が重要になる。その勧誘の場として、毎週土曜・日曜の2つのアフリカン・レストランでの、カメルーン人たちの集まりが情報伝達のための「たまり場」として意味をもつ。その一つ、埼玉県越谷にあるクリス・レストランについて、その「たまり場」機能を見てみよう。

このアフリカ・レストランの持つ社会的な結合機能は、カメルーン専門家のこのレストランへの訪問の機会に現れている。2005年11月に大袋のナイジェリア人経営クリス・レストラン(通称アフリカン・レストラン)を訪れたとき、ナイジェリア人の客が8名、カメルーン人の客

が3名いた。日本人らしい客は、名古屋から来たカメルーン研究の大学教師（和崎春日）とあと一人だけであった。このカメルーン研究者は、カメルーン人とバムン語やフランス語を含むカメルーンでの内的でエミックな言語で語っていたが、ナイジェリア人ともう一人の日本人が親しそうに喋っているのを見て近づいてみた。そこから聞こえてくる言語、つまり日本人とナイジェリア人が喋っている言語は、なんとハウサ語であった。そこで、日本人二人が顔を見合わせると、この二人は、27年前に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所でともにハウサ語言語研修コースで学んだ同級生であることを確認しあった。当時のハウサ流の呼び名で互いに「モハマドウ」「スレマヌ」と呼び合い旧交を温めたのである。今日では、一方が越谷の文教大学教員、他方が名古屋大学教員として、ともにアフリカ文化を教えている。これは、日本におけるアフリカ情報・文化の結節点が限られるがゆえにここで再会が可能となったという、このアフリカン・レストランのもつ社会的結合機能である。

また、こうした過去の関係者の再会といったものとは違って、アフリカに関わりのある人たちであっても、見知らぬ者同士がここで会うことがもちろん数多くある。名古屋の英語圏アフリカ人とともに、フランス語圏アフリカ人との交流があるこの大学教師（和崎春日）は、このクリス・レストランで名古屋から週末の土曜日曜を楽しみにやってきたセネガル人（ウォロフ人）Lya Sylluaに出会う。セネガル人にとっては、日本でフランス語、それも「アフリカらしい」フランス語で語り合えるのは、どこか緊張を解いてアットホームになれる機会である。娯楽で訪れる東京見物や周遊では、まず埼玉・大袋のクリス・レストランや春日部一ノ割の Afro Wave レストランに行け、という初期情報が滞日アフリカ人にあるということである。26歳のセネガル人リア・シルアは、すでに日本人女性と結婚し、名古屋の地下鉄・東山線沿線の藤が丘に住み、ここでアフリカ太鼓ジェンベを教えている。

こうした意味で、クリス・レストラン（企業名は Verochris Foundation）は、新しい仕事や交通やチャンスや娯楽や友人・同僚・仲間、恋愛の相手など、多様な新情報・新機会を獲得する場となり、ネットワーク拡充の場となっている。アフリカ関係の人・もの・ことがここに集まってくるのである。中古自動車やパーツビジネスのカメルーン人の仲間同士であるアポロとコルネリウスも、ここで待ち合わせをしていた。また、春日部一ノ割の Afro Wave レストランでは、カメルーン人男性と日本女性の結婚後の初出産の祝いを、本国カメルーンでみんなが祝うように、故国での「伝統」やしきたりに沿うように、祝福のパーティを開催して30人ものカメルーン人がここに集まった（写真3参照）。これら2つのアフリカン・



写真3 滞日カメルーン人たちが集めたお金を、出産祝いとして渡す。Afro Waveにて。

レストランは、同一文化内のアット・ホームな雰囲気の中で心を休め休息をとり安心できる場であるとも言える。たとえば、カメルーンでは、オリンピック・サッカーでカメルーン金メダルの立役者となった「エムボマ」選手を「エムボマ」などと呼ばない。「ンボマ」「ムボマ」「ボマ」と呼び、日本で「エムボマ」と呼ぶときは、日本社会のアフリカ文化への無知に対する揶揄やときに抗議の姿勢として、冷笑・失笑しながらこの人名タームを発することが多い。そうしたカメルーンやアフリカをめぐる文化価値の共有がここにはある。

ここで、幹事バジルは、「ちゃんとしている」かどうかや在留資格の有無等を勘案しながら、「アカジャ」年末文化祭への参加を促す声をかけていくのである。

2-2 在日カメルーン人たちの属性と在日カメルーン人会「アカジャ」

「アカジャ」とは、英語の短縮形である。Association of Cameroonians in Japan でアルファベットで書けば ACAJA と短縮形で表す。母国カメルーンにおいては、フランス語圏カメルーン70%、英語圏カメルーン30%と、領土面でもさまざまな経済・社会面でも、英語圏カメルーンがマイノリティの位置づけにある。だから、政治的に英語圏カメルーンの人々の被差別意識がくすぶる場合もある。首都ヤウンデの母村追跡調査で会った英語圏出身者アポロは、実際に「フランス語ができるのか」とフランス語圏話者に揶揄される場面を、語っている。あえて判らないフリをして会話を有利に導くときもあるという。つまり、英語圏カメルーン人はマジョリティ言語のフランス語が下手という判断が一般フランス語圏カメルーン人にはある、ということである。しかも、経済のチャンスは、フランス語圏に位置する首都ヤウンデと人口100万の「経済首都」といえるドゥアラにかなりの程度で集中・収斂するところがある。経済的に英語圏カメルーン人は不利な場合が多いといえる。

そうであるのに、日本におけるカメルーン人同郷団体の名前を、フランス語表記ではなく、英語表記にしているのには、2つの理由がある。まず第1は、日本において英語の方が、日本社会や日本人に説明しやすいからである。第2には、英語圏カメルーン人のイニシャチブが日本において大きいということである。実際に、ここでは、幹事のバジルがフランス語圏のバンガンテ出身であるものの、会長フル・アントニー・ンデは英語圏のバメンダ・マンコン出身であり、幹事サミュエル・ンフォー・ングワも英語圏のチーフダム・バフツの出身である。幹事エレクト・ンゲーも英語圏のチーフダム・ンクウエンの出身である。

この2番目の理由は大きい。実際、埼玉県春日部市一ノ割のカメルーン・レストラン Afro Wave で出会うカメルーン人労働者は、ほとんどが英語圏出身者である。確認しただけでも、サンタ、バメンダ、マンコン、ンクウエン、バフツ、バリ、ベンガイ、ンジャー・エトゥウ、ブエア、ムニヤ、リンバ、とすべて英語圏カメルーンの町や村の名前が並ぶ。会長のアンソニー・フル・ンデは、英語圏では有名な名前である。現カメルーン大統領のライバル・政敵はバメンダ出身で、やはりフル・ンデという同名であって、その一族名をあらわしている。バメンダには他の都市に

はない、機動隊の駐屯基地がある。前々回の大統領選挙ではフル・ンデ氏は、選挙期間中と選挙後、中央政府が派遣した軍隊とこの機動隊によって自らの家に幽閉された。こうしたさまざまな心理的抑圧を受けていると感じている英語圏カメルーンの人たちが、海外に経済チャンスを求めて展開している、という側面が認められる。

2-3 在日カメルーン人協会「アカジャ」年末文化祭

2005年12月3日に、アカジャの年末文化祭 End of Year Cultural Party が開かれた。午後4時開始である。場所は、東京都目黒区大岡山にある東京工業大学である。東工大の100年記念館 Centennial Hall で行われた。このアカジャ開催場所には理由がある。日本-カメルーン関係にとっての歴史がかかわる。この在日カメルーン人協会の初代会長はジャン・ケンネ Jean Kenne であるが、かれは、20年前に東京工業大学において工学博士の学位をとり、日本人女性とも結婚した。後にヤウンデ大学に勤務したあと、カメルーンでカメルーン女性と再婚し、彼女を連れてまた来日し、今は東京工業大学の非常勤の教授であり、自分の研究室もあてがわれている。ジャン・ケンネは、いわば来日カメルーン人の草分け的存在である。かれの手配とアレンジメントによってこの会場が実現した。

アカジャ年末文化祭は次のように実施された。

- 16:00 招待客の到着
- 16:30 アカジャ在日カメルーン人協会会長の歓迎挨拶
- 16:40 駐日カメルーン大使閣下の歓迎挨拶
- 16:50 ファッション・ショウ
- 17:00 夕食
- 17:30 カメルーン人による舞踊パフォーマンス披露
- 18:00 ダンス・ダンス・ダンス
- 20:00 パーティ完

夕方4時50分から始まったファッション・ショウでは、お国自慢や自分の民族アイデンティティが大きく開陳される。まず西カメルーンのアダマワ高原のリング・バレー沿いにある諸チーフダムの民族衣装が披露された(写真1参照)。この服は、黒地にオレンジ色の精緻な刺繍が入り、人目につく。日本においても、カメルーン留学生が正装としてパーティなどにこれを着て現れる。ベルギーでは、パーティからの帰途と思われる青年がこの服を着ているので、尋ねてみるとやはり西カメルーン出身のカメルーン人だった、という経験もある。次いで、フランス語圏のバミレケ諸チーフダムの民族衣装が披露された。藍染の服である(写真4参照)。この藍染は、伝統的には、民族のなかでも高貴な者や貴族や首長・王の取り巻きのみ、着用が許されたもの

である。およそ25年前、このバミレケ・チーフダム
のひとつで観光文化的にはバムンとともに最も有名な
チーフダムであるバンジュンのチーフ（首長）交代の
継承儀礼があった。そのとき、当時南部県の県知事が
バンジュン新チーフになったのだが、この新首長は、
バムン王国を含む近隣の王・首長などが見守るなかで、
伝統的キングメーカーの長老から藍染のマフラーを首
にかけられ、鳥の羽を頭髮に刺しかけられて、新首長
の地位を継承した。フランス語圏のバミレケの諸首長
領（チーフダム）という、この藍染なのである。

みな、それぞれカメルーンの中での出身地の民族服
を着て登場する。北部カメルーンのフルベ、ハウサの
民族服も登場した。これは、ガンドゥーラと呼ばれる
長い上着で、バムン社会のなかでも多く着用されてい
る。これは、ガンドゥーラがイスラームの伝播によっ
て、フルベ、ハウサの流入と一緒にバムン社会に入ったからである。ただ、すべての民族服着用
者がその民族の文化を誇ってファッションを披露したのではない。人数が足りない。たとえば、
エリック・フォアレンは、ドゥアラ民族出身だが、ドアラではなく西カメルーンのチーフダムの
民族服を着て登場した。その西カメルーンのチーフダムの服も、男女一組で披露されたのだが、
男性のほうはバフツ首長領出身のサミュエルでバフツの民族服と合致していたが、女性は英語圏
カメルーンの出身者ではなかった。また、北カメルーンのイスラーム文化の影響を受けたフルベ、
ハウサの民族服を着ていたのは、フルベ、ハウサ民族ではないバミレケのンディゴである（写
真5参照）。こうして、それぞれの民族を誇るというより、カメルーン人以外の人たちに、全体
としてカメルーンの民族服を見せている、と
いう光景があった。年末文化祭での民族衣装
のファッション・ショーは、カメルーン国内
での民族の示差性よりも、カメルーン全体と
して他国や日本社会にたいしてカメルーン性
を見せていた、といえる。それを表すかのよ
うに、帽子を西カメルーン風の帽子の形にし
ながら、その柄を伝統的な模様ではなく、近
代国家のカメルーン国の国旗に似せて、緑・
赤・黄の三色で柄を作っていたものも何人か
いた。

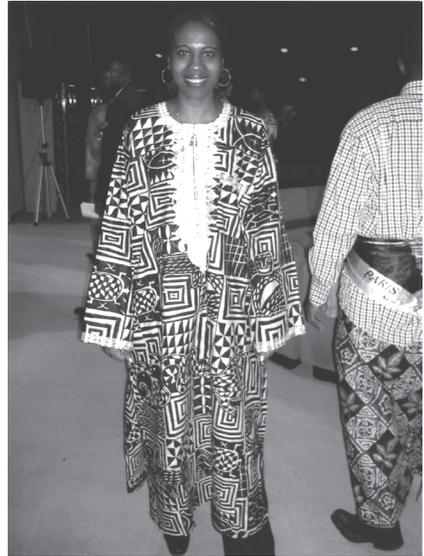


写真4 カメルーンの西部州・バミレケ及び北
面部州の藍染め服



写真5 バミレケ人（右端）でも、ハウサ服を着て登場し、
カメルーン人としてみんなと踊った。

これに続いた料理もカメルーンの民族料理が中心である。これには、在日カメルーン人のなかでも国際機関につとめてリーダーシップを持つゼメカ氏の夫人とケンネ教授の夫人が中心になって準備した。プランテンの油揚げ、クスクス、フーフー、バナナ・ドーナッツ、ドレ・ボワソン、ドレ・ピアンドなどのカメルーン民族料理が並ぶ（写真6参照）。そして、会食のあと、アフリカ文化を愛好する東工大学生もアフリカ各国大使もカメルーン人たちも、まさに混然とダンスを楽しんだのである（写真7参照）。



写真6 プランテンの油揚げなど、カメルーンの民族料理。



写真7 労働者も経営者も大使も混然とダンスを楽しむ。

2-4 多様な参加者の分析

この日のパーティには、多様な参加者が見られた。この参加者の多様層を年末文化祭の開始から、振り返ってみよう（図1参照）。

午後4時前になると、続々と高級自動車が到着した。青色のナンバー・プレートの自動車で、大使館の外国公用車である。現・在日カメルーン大使であるベランベラ大使が迎えたのは、在日ギニア大使の Ousmane TOLO THIAM 大使と令夫人とその令嬢であった。さらに、ガボンの Jean-Christian OBAME 大使夫妻、ケニアの Dennis A.O. Awoni 大使、ザイールの Mulunma Ishidimba 大使、エルトリアの Estifanos Afeworki 大使、ベナンの Bmtole Yaba 大使、そしてマリ女性大使の Guisse Memouna Dial 大使が、続々と会場に到着した。なんと、アフリカ8カ国の在東京大使が参集していたのである。したがって、迎える側のカメルーン人たちの服装もスーツや民族衣装をはじめとして正装が多い（写真8参照）。

そして、日本とカメルーンを結ぶキーマンの一人といえる日本の大学教授（和崎春日）も参加



図1 在日カメルーン人協会・年末文化祭の着席図

した。この招待のされ方に、この日の在日カメルーン人の参加者がどうした社会層であるか、が現れている。というのは、この大学教師は、大使秘書から案内を受けると同時に、もう一つ、別ルートで誘いを受けた。それは、越谷市大袋にあるナイジェリア人経営のアフリカ・レストラン、クリス・レストランを訪れた際、ここに来ていたカメルーン・バミレケ人のバジルから在日カメルーン人協会のアカジャ年末文化祭の案内を受けて、参加を勧められたのである。バジルは、自動車関係の仕事を成功させ、日本人女性とも結婚し一児をもうけ、東武東上線の高坂に居を構えて、安定した経済状況と家庭生活を送っている。つまり、「身元のわかる」信頼できる人物である。だから、在日カメルーン人協会の幹事や会計を担当している。その日も、コルネリウス、アポロ、アチル、ウォータースなど自動車関係のカメルーン人労働者はクリス・レストランに来ていたのだが、結局、コルネリウスたちは、年末の在日カメルーン人会パーティには参加していない。誘われても行きにくいという側面もあるが、一種の社会階層の反映が年末文化祭の参加者に見てとれる。

その証しが、在日カメルーン人のもっている人的・家族的ネットワーク資源である。たとえば、このときアカジャ年末文化祭に参加していた Eric Foaleng エリック・フォアレンは、かつて日本のプロサッカーのガンバ大阪やベルディ東京で活躍したカメルーン人「エムボマ」選手の家族であるといい、列席していたカメルーン専門家の大学教師とエムボマ一族とが近い知己であることを知っている、と自己紹介してきた。そして、故人となってしまった、エムボマの実質的な父であり養父（生物的には父方オジ）のサミュエル・ドゥムベマンガの夫人に携帯電話ですぐさまカメルーンに国際電話をかけた。そしてこの大学教師と夫人とを話させたのである。このサミュエル・ドゥムベマンガは、日本—カメルーン国際協力関係の草分け的存在で、在日カメルーン大使館のなかった1980年にすでに日本の東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の招待を受けて来日し、当時のカメルーンの文部学術機関 Office National de la Recherche Scientifique et Technique 国立科学技術研究機構とアジア・アフリカ言語文化研究所との国際学術協定を結んだ人物である。さらに、エリックは、パリに住む「エムボマ」夫人 Marrie に携帯電話で国際電話をして見せた。こうして、自分の持っている家族・親族資源の信頼の高さを示して見せたのである。エリックは、自動車のパーツビジネスに関わっているが、その経営者というよりは手伝的な労働に携わっているが、アカジャ・パーティに参加していることの正当性を主張してみせた、と捉えられる。



写真8 着席したギニア大使(左)とケニア大使(右)の前に、挨拶するフル・ンデ会長(右)とそれを訳すサミュエルとエレクタ。

また、六本木での客引きとビラ配りという、インフォーマル・セクターのきわみのような職種につきながら、この年末文化祭に参加した者がいる。それは、アラン・オンドアである。アランは、月曜から土曜にかけて、六本木の一番の象徴ともいえるアマンド交差点で、通称「エッチ系」のピンクビラを配っている。ビラには外国人女性たちが肌もあらわに踊る姿が印刷されている。1年前までは、アランは、この六本木交差点でビラを配って客引きをしていたが、昨年からは、もうひとり英語圏からやってきたカメルーン人ジャックの紹介で、六本木7丁目の雑居ビル6階にあるピンク系キャバレー Seven's Heaven の客引きをしている。このビルには、Shadow Café 'Bad Girls' という店名の日本人女子大生クラブなどがあり、性や性表象を売り物にしているキャバレーでビルが埋めつくされている。ジャックの父は英語圏カメルーンの出身者で、今はイギリスに住んでいる。したがって、ジャックは2005年のクリスマスから2006年の新年にかけて、イギリスにお里帰りした。家族史的には、カメルーンからイギリスへ、そして日本へという2段階の来日の形である。

この Seven's Heaven には、通常6名ぐらいの外国人女性がU字型座席シートの前にしつらえられた金属ポールで、客の要望に応じて踊って見せる。ロシア人、ルーマニア人、中国人、日本人に混じって、カメルーン人女性 Tracy もここで働いている。Tracy は、通称、パッシイという名前でも通っている。トレイシーは、日本でナイジェリア人と出会い結婚した。このジャックとトレイシーだが、二人は、アカジャ年末文化祭には登場しなかった。一方、同じ六本木の職業的境遇にあるアランは、参加したのである。それは、アランの家族・親族資源による。アランの父方オジは、前在日本カメルーン大使 Atangana-Zang Andre-Marie アタンガナ・ザング・アンドレマリーであり、その紹介もあって、在日本のビザ獲得上の職業はトルコ大使館館員ドライバーである。トルコ大使館のために働いて運転しなくはないが、この職はほとんど有名無実である。ビザ獲得のためだけの手段的な職業と言ってよい。日曜を除いてほとんど毎日、夕方から深夜・早朝にかけて、アランは六本木の路上で働いている。

もうひとつ、アランの政治上有利な点がある。それは、彼の出身地である。現ポール・ビア大統領は、ヤウンデの南出身だが、このアタンガナ一族もヤウンデの南方にあるビコック近辺の出身であり、大統領と同じブルー系の民族である。北部フルベ民族出身のアイジョ前大統領時代は、資源がない北カメルーンにも道路整備が積極的に進められた。インフラ整備が進められたりその他のプロジェクトがカメルーン国内で落ちたりするところ、つまり開発の促進地域は、現大統領になってから圧倒的に南部カメルーンが多く有利になったといわれる。つまり、民族で言えば、南部カメルーンのエウォンド、ブルー、エトンなどの南部言語系諸民族が、さまざまなチャンス獲得で有利だといわれている。その分、逆に「利が少ない」と感じている西カメルーン・英語圏カメルーン人たちの海外への志向も強くなっているものといえる。

さらにもうひとつ、このアタンガナ前駐日大使で重要なことある。それは、「アカジャ」在日カメルーン人協会のことであり、アタンガナ大使が日本大使時代にアカジャの準備と設立と発足

を、日本で博士を取得したジャン・ケンネとともに努力し、アレンジして実現したのである。

アランは、歓楽街の客引きだが、こうした「水商売」の店を開いているエレクタも参加した。エレクタは、春日部市一ノ割にカメルーン・レストラン Afro Wave を開いたのだが同じように越谷市大袋のアフリカン・レストランで働いている Donna ドナや Karine カリーヌは出席していない。店を開いているというのと店に勤めているという差がある。と同時に、水商売でも信用のネットワークをもっているかどうか重要で、横浜にある国際木材機関の事務局次長であるカメルーン人・ゼメカと繋がっているエレクタは参加し、こうしたキーマンと繋がっていない水商売関係者であるドナやカリーヌは参加しなかった、あるいはできなかった、といえる。一方、エレクタは、ゼメカとの関係があり、さらには、静岡の近藤社長が経営する海運会社 K-WORLD の社員という身分も持つ。最近では、自らがもっと主体的に商売ができる海運会社を夫のダミアンと共同で設立している。海運会社に力を入れているということは、レストラン経営以上に、中古自動車・パーツビジネスのほうに力点を置いているということである。こうしたしっかりした社会的属性をもち、日本語ができることもあって、エレクタは、この日、年末文化祭の司会の役割をになった。そして、会長フル・ンデのフランス語挨拶を日本語に逐語訳する役割を遂行した。エレクタは、平生から、在日カメルーン人協会の幹事役を務めている。

同じ「水商売」関係では、Judith Wanso Atanga ジュディス・ワンソ・アタンガが参加した。彼女は、東京の都心地域・池袋にアフリカン・レストラン O Village を開いている。埼玉県の高尾市から池袋に通っている。日本の滞在暦も長く、もっとも長く日本に住んでいる、あるいはもっとも古くから日本事情に通じている数少ないカメルーン人のうちの一人である。日本にカメルーン大使館ができたのは、1987年のことだが、その初代駐日カメルーン大使ツァマ大使の秘書を勤めたのが、このジュディスであった。2代目大使になってもしばらく秘書を務めていたが、それ以来の滞日経験をもつことになる。現在の在日カメルーン大使館は、東京・世田谷の松原にあるが、かつては渋谷近くの南平台にあった。ジュディスは、そのときの事情を知る数少ないカメルーン人である。水商売といっても、自らのネットワークに大使という人的資源を持っている。そうであるがゆえに、この年末文化祭に参加しえたのである。

日本社会で指導的な地位と認められている職務を遂行している在日カメルーン人も参加している。それは、上で少し触れた Emanuel Zemeka エマニュエル・ゼメカである。かれは、横浜みなとみらい地区に建つ高層ビル・横浜国際協力センター5階にある国際機関・国際熱帯木材機関の事務局次長を勤める。その関係で秘書の中国人女性とこの機関で働くガーナ人男性の2人を連れて参加してきていた。ゼメカ次長は、カメルーン人から頼られる存在でもある。埼玉一ノ割にエレクタがカメルーン・レストランの Afro Wave を出店する前は、横浜のゼメカ宅に身を寄せていた。さらに1999年12月、エレクタの2歳年上の姉エヴェリーヌが日本にやってきたときも、ゼメカ宅に1ヵ月半も世話になっている。Afro Wave の出店についても相談にのり、今でもいざというときにはゼメカが関わる。他のカメルーン人から Afro Wave の電話だと番号を

知らされて電話すると、ゼメカ夫人にかかったこともある。在日カメルーン人協会の現会長フル・ンデも、自分が興じた現在の自動車関係のマーケティング&コンサルティング会社であるアリフ・トレーディング有限会社が軌道に乗る前、来日当初は、ゼメカからさまざまな情報や便益をもらっている。フル・ンディにとってゼメカはいわば「兄貴分」的な存在である。

カメルーン人以外の外国人では、日本人のほかに目立つのが、パキスタン人である。他のアフリカ諸国からは参加していても自然な感を受けるが、パキスタンからの参加はなぜなのかという疑問が起こる。それをつなぐものは、自動車ビジネスである。在日カメルーン人の成功ビジネスは、会長フル・ンデをはじめ、自動車関連の諸仕事に収斂するところが大きい。その自動車ビジネスの大取引先が、このパキスタン人 Abid Zia アビド・ズイアなのである。ズイアは、KAITO Motors 日本名では有限会社・和ズイアエンタープライズを持っている。これは、中古車の販売、買取、中古機械の買取とそれらの輸出をてがける会社である。千葉県の酒々井町にこの会社をもつ。千葉、茨城、埼玉は、来日アフリカ人にとって、多くの在日カメルーン人たちがよく「解体屋」と口にする、自動車解体など車ビジネスのさまざまな工場や仲買・卸商社が存在するところである。こうした関係で、カメルーン人よりも先に自動車ビジネスにネットワークを張っていたパキスタン人の影響力は、無視できない。この関係で、カメルーン大使館付きの公用車運転手は、Tayyab Rabbani という名のパキスタン人である。このタヤブもこの日のアカジャの年末文化祭に参加した。

日本人参加のなかには、日本にやってきたカメルーン人を積極的に雇っている雇用主がいる。千葉県の後藤和男社長もそうで、彼はサンワリネンというリネン・クリーニング会社を経営している。そして、カメルーンからやってきたバミレケ人の若者 Ndigo インディゴを雇っている。「真面目によく働く」と評価する。また、日本の学究分野では、カメルーンのエトンの市場活動を研究している名古屋大学の大学院生・塩谷暁代が参加した。

また、カメルーンからの留学生で東京圏在住のカメルーン人も参加した。横浜国立大学に工学系で留学してきている Talla Takam は奥さん同伴で参加した。今は、研究員という資格も得ている。こうした「学」や「文化」の関係では、先のサミュエル・ンフォー・ングワがおり、上述したとおり、彼は狂言師である。ただ、それだけではなかなか「食べて」いけないこともあり、赤羽根第2中学英語教諭を皮切りに東京近辺で英語を教えている。在日本カメルーン大使館で大使をサポートする書記官たちも、1等書記官 Roderigo Nchalle、同 John Billy Eko、2等書記官 Ralph Galega Gana の3人が参加した。かつて在日本カメルーン大使館は、参事官、書記官、アタシェ4-5人体制のときもあったが、今は少し縮小体制の3人となっている。

つまり、このように在日カメルーン人協会の年末文化祭への参加者像を見てくると、ここに参集した人たちは、法的にオーバー・ステイにならない、職業上、地位上、確実に安定した身分をもつ人たちである。そういう人たちがここに参集している。つまり、同じ在日カメルーン人であっても、経済的にも社会的にも上中層階級の中や淵にいて相互に関係をもちうる、滞日、来住

あるいは日本人と結婚といった身分が安定した人たちと、そのネットワークの直接的な恩恵に浴せない、法的にオーバー・ステイにさえなってしまう、日々の暮らしにカツカツで車産業などで下働きをする短期来日カメルーン人がいる、ということである。また、それだけ階層差や幅をもって来日カメルーン人が増えてきているということでもある。

むすび——在日・滞日カメルーン人間の協力と階層差

以上きわめて限られた事例からの考察で、定めきれぬ結論は導けないにしても、論点については、整理しておく必要がある。本稿の論点の一つは、こうしたカメルーン人同士の協力行動およびそれを目指した組織化が、階層をまたいだ協力体制をとっているのか、一種の権威制のもとに限られた峻別性を示すのかどうか、であった。

狂言を軸にした日本カメルーン友好協会は、カメルーンでの狂言公演の実現という一つの大きな目的を達成したが、そこに見え隠れするプロダクションや特定関連者の「利益性」に逡巡を覚える人たちもいた。つまり、ここでは日本とカメルーンを恒久性を有してつないでいくような、あるいはその基礎となるカメルーン人の協力行動が見られるような連帯があるわけではなかった。日本の伝統芸能という分野を軸にした結集には、その「高尚性」から、指導者から労働者までといった多層的な人々のつなぎとめにはなっていなかった。だが、こうした日本の歴史深い伝統分野にカメルーン人が深く食い込んで認められているということは、在日カメルーン人のみならず滞日カメルーン人たちにも「誇り」を抱かせるものであった。

一方、在日カメルーン人協会は、レストランなど「水商売」系の仕事を持つ者も、中古自動車のビジネス関係者も、さらにはその労働者や六本木で「H系」クラブのピラ配り労働に従事する者まで関わって、構成されていた。その意味での人的な上下の社会階層の多層性が、在日カメルーン人協会にはあった。ただ、同時に、その大きな集会である年末文化祭では、アフリカ大陸の8ヶ国の在東京アフリカ大使が参加するぐらいに、そのフォーマリティや敷居は高く、堂々と在留資格を持っているカメルーン人たちが中心となって参集していた。つまり、在日カメルーン人協会「アカジャ」が、日本に足場を根ざしえた、あるいは根ざしつつある在日カメルーン人は吸収しえても、「中古自動車とコンテナ・ビジネス」のチャンスに満ちた「黄金の国」日本に続々とやってくる、多くの一攫千金を夢見る滞日のカメルーン人を吸収しきれぬほどには、キャパシティをもっているものではない、つまり限定性を有する統合機能を見せている、と捉えられる。

「アカジャ」ジャン・ケンネ初代会長が「オーバー・ステイになるようだったら、一度外に出て戻ってくればよい」と発言するように、日本で戦略性をもって法の網の目をくぐる生き方をし、1日おおよそ1万円の労賃が出て、1日でも多く働けばそれだけ稼ぎになるオーバー・ステイ中の中下層の労働者たちは、在日カメルーン人協会のもつ包摂性の外にいることになる。そうではなくとも、いつでもどこでも日本にいるカメルーン人なら完全に協会内に包み込まれているという

わけではなかった。中古自動車・パーツ売買業に携わる労働者たちのように、経済階層の上下については、やはり身元の確かな中層以上の者たちが互助協力の基幹となっている、とあってよいだろう。

だが、カメルーンを構成するヨコの民族間の違いについては、バミレケ人も、ドアラ人も、ブルー人も、英語圏諸チーフダムのティカール人も、多様に在日カメルーン人協会に包摂されていた。文化祭のファッションショーでは、ドゥアラ人が西カメルーン人を演じ、バミレケ人がハウサ・フルベ人を演じたように、カメルーンのなかでの民族示差性というより、カメルーンのなかでのまとまりが表象化されていた、とあってよい。つまり、この会は、この服装文化の表現からも理解できるように、民族の違いを超えるカメルーン人としての統一性に収斂している側面が強い。また逆に、日本にいるカメルーン人では、日本にあるナイジェリア人社会のなかで単一の民族だけで巨大な在日の集合組織がつかれるイボ人のような^(注5)、人々の多数性と凝集性をそなえた、多人数の民族集団はない。かつて筆者が移民の生活戦術として3つを理論的に整理したように、他民族モードの借用など、自分の民族境界を超えてさまざまな連帯・協力の形を作っていかななくてはならないのである^(注6)。

上のような点を指摘できるだろう。ただ、在日カメルーン人協会の活動といっても、本稿では、簡単な役員構成の説明と、ハレの場たる年末文化祭での在日・滞日カメルーン人の集合行動を説明しただけである。在日カメルーン人協会がどのような相互扶助機能を持ち、どのような範囲で協力・救済機能をもっているかは、さらに、日常のケにおけるカメルーン人たちの情報交換や交流の様態と、非常事態に遭遇したときの在日カメルーン人協会の活動とを、カメルーン・レストランなどがおこなう互助活動とあわせて、調査・検証していかねば、定かにならないだろう。これは、今後の課題である。今後、日本におけるカメルーン人たちの相互協力のあり方の調査を重ねながら、特に、多くのカメルーン人がすでに関わっていて、さらに新しく参入しようとするカメルーン人も多い中古自動車・パーツビジネスの様態をめぐって分析・考察を進める^(注7)ことが、全体としての在日・滞日カメルーン人の生活動態を明らかにすることにつながる、と考えている。これを特に次稿の課題としたい。

附記：文中の敬称は略した。ここで示した考察は、日本学術振興会・科学研究費補助金による共同研究「来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究」（一般研究、基盤A、課題番号16202024、平成16－18年度、主査・和崎春日）と「滞日アフリカ人の生活戦略と日本社会における多民族共生に関する都市人類学的研究」（一般研究、基盤A、課題番号19202029、平成19年度、主査・和崎春日）によって得た資料に基づくものである。

注

- (1) 六本木の歓楽街のドアマンや呼び込みをすると、1日12時間労働、週6日で、約15万円の収入である。金額は「まづまづ」でも労働が過酷で「これでは体がもたない」とナイジェリア人ドアマンという〔和崎春日2004〕。川田薫は、六本木における4人のアフリカ人労働の生活誌を描いて、その労働条件の厳しさと警察との駆け引きや「かわし」の戦術について詳しく論じている〔川田薫2005〕。
- (2) 若林チヒロは、日本社会のマジョリティにあるアフリカ黒人に対する「偏見」に充ちた視線が、逆に、アフリカ黒人としての「プライド形成」のための、国や民族を超えた勉強会やアソシエーションを生み出していることを論じている〔若林チヒロ1996〕
- (3) 在日・滞日アフリカ人の生活のためのネットワーク行動は、アフリカと日本をつなぐだけではない。逆に「アフリカから」を視点に、アフリカ人の世界をまたぐ積極的な活動動態とディアスポラを考察してきた三島禎子は、西アフリカのソニンケ人が香港、タイ、シンガポールなどアジア諸国に分厚い商業ネットワークをすでに張っており、アフリカ人が一般イメージや偏見としてある「閉ざされ遅れた未開人」などではまったくないことを論じている〔三島禎子2003〕。さらに、三島は、そうしたソニンケ人のインター（ナショナル、エスニック）な行動特性が、植民地以後の近代などに始まったことではなく歴史的に古い時期から繰り返され、その移動に伴うノウハウと商業知識が蓄積されてきている、根っからの国際人であることを論じている〔三島禎子2006〕。
- (4) バミレケは、カメルーン国内にあつては、むしろ本論に多数登場する西カメルーン・ティカール系のアングロフォン（英語圏カメルーン人）以上に、最大で最も典型的な「商業の民」「商人」とされている。その村から大都市に出たバミレケ人の活発な商業活動については、野元美佐が分厚い都市生活誌『アフリカ都市の民族誌—カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』をまとめている〔野元美佐2005〕。日本に多数やってきた商業民では、英語圏カメルーン人が一番多いが、それ以外でバミレケ人がいることは、カメルーン国内における経済動向からも納得できる。
- (5) 松本尚之によれば、母国ナイジェリアにおいても、村から町にでたイボ人たちが多様な協力の同郷団体をつくり活発な互助活動をおこなっている〔松本尚之2004〕。このイボ人たちが多数、日本にやってきている。川田薫によれば〔川田薫2006〕、在日ナイジェリア人においては、これを構成するヨルバ人、イボ人、ハウサ人のなかのイボ人という民族単位の結社ばかりでなく、イボ人が住む各州のなかでイモ州だけで在日結社が結成されうる。それだけ多くのイボ人が来日しているということである。
- (6) 新しい関係の「創造」、他者がもつモードの「借用」、自分のモードを修正して生かす「修正」といった、都市生活における対処法が存在する〔和崎春日1988〕。松田素二は、都市出稼ぎ民が①路上販売などインフォーマル・セクターで生きる②都市農業をする③農村・故地との紐帯を再組織化して都市に活かす④北側の開発組織に参入する、といった4つの生活戦術をもつことを論じている〔松田素二1999〕。松田は、さらに、こうしたミクロな生活戦術を通じて、「小さな」都市住民や出稼ぎ民が、あえぎつつも、「大きな」都市を逆に「飼いならす」回路をみいだそうとしていることを論じる〔松田素二1996〕。
- (7) こうした中古自動車・パーツビジネスに携わるカメルーン人たちは、軽々と世界を又に掛ける。春日部で自動車解体ヤードを経営するグッドラプの兄にカメルーン的首都ヤウンデで会ったが、彼は、最近、日本の他にアラブ首長国連邦・ドバイに買い付けに行っている。また、埼玉・越谷のアフリカ・レストランとベルギー・ブルッセルで出会ったブルッセル在住のフルサン・エリックは、カメルーンのアラ港には弟を待機させ、日本とベルギーで日本製を中心とした中古車を購入し、カメルーンに送り込んでいる。フランスにおけるカメルーン人移民の動態については、パリのChateau Rouge近辺で田淵六郎上智大准教授と2回の予備調査を行い、文献による考察〔Sophie Bouly de Lesdain, 1999〕を行ってきたが、バミレケ女性たちの果実売りの実態は認め得ても、パリと日本を結ぶ中古車ビジネスのパイプは今のところ確認していない。ただ、日本やベルギーでの買い付け、自動車解体、コンテナ詰め、海運輸送の手続き、アラでの受け入れ、コンテナ搬送、カメルーンのヤードでの左ハンドル化、販売の流れをめぐって、筆者は一応の初期調査を完了した。この実態を描いていきたい。

参考文献

- 川田 薫 2005 「東京の西アフリカ系出身者の生活技術——六本木におけるサービス業従事者を事例にして」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』60号、71 - 92 ページ
- 川田 薫 2006 「在日ナイジェリア人のコミュニティの共同性の構築——イモ州同郷人団体がつなぐイボ民族の生活世界」『生活学論叢』11号、127 - 138 ページ
- 川田 薫 2007 「在日ナイジェリア人のコミュニティの形成——相互扶助を介した起業家の資本形成」『関東社会学』20号、179 - 190 ページ
- 松田 素二 1996 『都市を飼いならす——アフリカの都市人類学』河出書房新社
- 松田 素二 1999 『抵抗する都市——ナイロビ 移民の世界から』岩波書店
- 松本 尚之 2004 「イボ社会における同郷団体の歴史の変遷——自助活動の運営をめぐる都市移民と母村住民の関係」『文化』68号、89 - 104 ページ
- 三島 禎子 2003 「ソニンケにとってのディアスポラ——アジアへの移動と経済活動の実態」『国立民俗学博物館研究報告』27巻1号、121 - 157 ページ
- 三島 禎子 2006 「ソニンケ商人の歴史——砂漠を越え海を渡る人びと」『朝倉世界地理講座 11 巻 大地と人間の物語』立川武蔵・安田喜憲監、286 - 299 ページ
- 野元 美佐 2005 『アフリカ都市の民族誌——カメルーンの「商人」バミレケのカネと故郷』明石書店
- 若林ちひろ 1996 「滞日アフリカ黒人の『プライド』形成のためのネットワーク」『日本のエスニック社会』駒井洋編、明石書店、
- 和崎 春日 1988 「都市人類学からみた『都市の本質』——都市生活者の生き抜き戦略とエスニック・バウンダリー論」『都市問題研究』第40巻2号、80 - 95 ページ
- 和崎 春日 2004 「はるかな相異をわれらが袂に結びとめる日——来住アフリカ人と日本人との共生」『月間みんぱく——特集・日本のなかの外国人』第28巻第5号、6 - 7 ページ
- 和崎 春日・田淵 六郎 2007 「来日カメルーン人の母村・家族状況——来住アフリカ人の母国における家族の社会・経済状況」『スワヒリ&アフリカ研究』第17号、大阪外国語大学地域文化学科スワヒリ語・アフリカ地域文化 研究室、117 - 144 ページ
- Sophie Bouly de Lesdain, 1999 "Femmes Camerounaises en Region Parisienne — Trajectoires migratoires et Reseaux d'Approvisionnement", L'Harmattan, Paris